

豊穰の貧困か

小島麗逸

アジア経済研究所の元会長篠原三代平先生が文化勲章を受章された。初代所長の東畑精一先生について二人目である。研究所に在籍した者として誇りに思う。

研究所が創立された翌年入所したが、当然図書館の資料は寥寥たるものだった。中国にいたつてはその年（一九六〇年）から『人民日報』と『紅旗』しか外国に出さなくなった。東畑先生はとてもこの事態を心配されていた。ある日、『人民日報』を創刊号から持っている人をみつけたから、貸与の交渉に行くように言われた。保有者は佐藤慎一郎先生である。

中国研究者はこれに頼るしかなかった。しかし、党の宣伝紙で、人口や食糧・鉄などの統計は一切国家秘密。たまに数字があるとすれば、何々は前年比三〇％増というようなもののみ。それで経済力をはかることなどできない。仕方がないので、発展水準が似た国や日本の資料から、類推作業を長いことしていた。

ある日、図書館で一橋大の『経済研究』をパラパラ見ていたら、たんぼのあぜ豆の生産量が日本農村の味噌と醤油の原料に相当するという研究が目に入った。著者は篠原三代平とあった。国民所得論は大学で習ったが、子供の頃毎年母親からあぜ豆を播いてこいとやられていた大豆が、国民所得論と結びつくところなどに面白く解釈できるのだとまさに啓示であった。篠原三代平なる名が筆者に刻印されたのはそれ以後だ。

この二〇年アジアの発展はすくなく、出版物は洪水状態である。

それ以前の二〇年分が一年間で出版される様である。しかも、大方GNP体系にまとめられて出る。中国にいたつてはひどいもので、三一の省級政府、六六〇の市、二九〇〇の県まで年鑑を出す。その上に産業各部門の統計集が出る。パネル統計とコンピュータがあると、モデルに従って計算すれば昔一年かかった論文は一週間でできる。図書館の方は出版物の洪水でつちもさつちもいなくなる。この傾向の文献を集めないと、研究者に批判される。

東畑先生は「石板の時代からコピー機の時代まで生きたよ。昔は本を一冊筆写したことがある」とも言われていた。文化勲章受賞祝賀会で、篠原先生は「グラフ用紙に鉛筆なめなめやってきました。グラフ上の線が上下するところからボカッボカッと発見があった」と挨拶されていた。その昔、研究所の片隅で出始めた卓上計算機をハンドルでぐるぐる回し、チンという音がすると、それをノートに記されている姿を何回か見ている。

整理された資料とエクセルがあれば、グラフの線は瞬時に描けるが、線の曲がりや上げ下げが内包する問題を考えることがなくなる。その方の脳細胞は衰える。ボカッボカッがなくなる。整理された資料も必要だが、それで足で歩いた資料が等閑視されるとボカッボカッの衰退が加速する。研究者は両方必要なんだが、どちらの方に顔を向けておりますか。

（こじま れえいつ／大東文化大学名誉教授）